

Title	21世紀のフランス人民戦線史
Author(s)	渡辺, 和行
Citation	国際公共政策研究. 2013, 18(1), p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50273">https://hdl.handle.net/11094/50273</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 21世紀のフランス人民戦線史

## Historiography of the French Popular Front since 1960

渡辺和行\*

Kazuyuki WATANABE\*

### Abstract

The object of this paper is to examine the historiography of the French Popular Front since 1960. It is possible to distinguish three phases of Popular Front studies after 1960.

In the first phase (1960-80), the academic study of the Popular Front had started by 1965. Many books and articles were written using an anti-fascist approach. In the second phase (1980-2000), the study of the Popular Front changed due to four factors. Many researchers studied the aspects of the Popular Front in terms of cultural studies and political representation. In the third phase (2000- ), it is necessary to synthesize the methods of the first two phases. We should write the history of Popular Front by way of three approaches: anti-fascism, response to economic crisis and cultural revolution. In addition to these approaches, we should not neglect the existence of the Radical Party that formed part of the Popular Front.

Therefore, concerning the study of the Popular Front in the 21st century, we need to integrate three analytic methods of the three parties that made up the Popular Front: Communist Party, Socialist Party and Radical Party.

キーワード：フランス人民戦線、レオン・ブルム、急進党、社会史

**Keywords** : French Popular Front, Léon Blum, Radical Party, Social History

---

\* 奈良女子大学文学部教授

## 1. 記録と記憶

谷川俊太郎の近作に「記憶と記録」という短い詩がある<sup>1)</sup>。谷川は、「こっちでは／水に流してしまった過去を／あっちでは／ごつい石に刻んでいる／記憶は浮気者／記録は律義者」と歌っている。アジア・太平洋戦争の歴史を想起すれば、この詩がリアリティを持っていることが分かるだろう。谷川が述べるように、たしかに記憶は歪められたり弱まったりする面があるが、記録も鵜呑みにできないことは歴史研究が明らかにしてきたところである。普遍的に言うことは、歴史は「証言の時代」から「記録の時代」、そして記録を通じた「記憶の時代」へと進んでいくということである。本稿が対象とするフランス人民戦線史も、こうした歩みをたどってきた。

そのフランス人民戦線が誕生して80年近い歳月が流れた。「戦争と革命の世紀」と言われた20世紀は、ソ連圏の解体によって幕を閉じた。ソ連型社会主義の瓦解によって、フランス人民戦線の歴史的評価はどう変わったのであろうか。人民戦線史の研究はどのように推移してきたのであろうか。本稿は、フランス人民戦線の研究動向を整理することを目的としているが、その意義を手短かに記しておきたい。

本稿執筆の動機の1つは、翻訳を含めてもここ40年ほどのあいだで、フランス人民戦線と銘を打つ書物が3点しか刊行されていないというわが国の貧寒な研究動向にある。後述する平田好成氏の書物と問題の多い翻訳（ジュリアン・ジャクソン、向井喜典ほか訳『フランス人民戦線史—民主主義の擁護1934-38年—』昭和堂、1992年）を除くと<sup>2)</sup>、日本人の手になるバランスのとれた人民戦線史は、1974年に出版された平瀬徹也氏の『フランス人民戦線』（近藤出版社）以来、40年近く出ていない。

もっとも、人民戦線と銘打ってはいないが、竹岡敬温氏の大著（『世界恐慌期フランスの社会—経済・政治・ファシズム—』御茶の水書房、2007年）も忘れてはならない。竹岡氏の研究は、第三共和政の崩壊やフランス・ファシズムにも論及して、1930年代フランスの政治と経済をトータルに把握しようとしているが、本書の半分が恐慌や経済政策に割かれているように、氏の専門である経済史に軸足が置かれている。それゆえ、本稿は過去50年間の研究をフォローして研究史の空白を埋めたという消極的な意義にとどまるものではない。単なる研究史の整理という域を超え、ソ連圏の自壊による冷戦構造の解体という歴史を踏まえて、21世紀のフランス人民戦線史はどうあるべきであり、どこへ向かうべきかを考察しようと思う。それでは節を改めて、人民戦線史研究の特徴について検討しよう。

1) 谷川俊太郎「記憶と記録」『朝日新聞』夕刊、2013年2月4日。

2) 邦訳初版第1刷には毎ページと言ってよいほど誤訳・脱字・脱行があり、論評に値しない。

## 2. フランス人民戦線史研究の3つの時期

### (1) 第1期 反ファシズムとしての人民戦線 (1960-80年)

今日までのフランス人民戦線史研究は、3つの時期に分けることができる。第1期は本格的な研究の開始期である。それは、人民戦線の誕生30周年を迎える1960年代半ばから始まった。それには3つの理由があった。30年という時間的隔たりが客観的な歴史研究を可能にするという期待感、当事者の証言を聞くことができる最後の機会になりかねないという危機感、それに、ドゴール体制への批判の高まりを前にした左翼連合としての人民戦線モデルへの実践的関心である。

1961年に史料をして語らしめる手法で編まれた書物が出版されていたが<sup>3)</sup>、本格的な研究の嚆矢となったのはジョルジュ・ルフランの仕事である。ルフランは、労働総同盟 (CGT) の研究機関である「労働者高等研究所」の所員で、社会党右派の一員として人民戦線運動に関与した人物である。彼は、その経験をもとに浩瀚な研究 (1965年2月出版) とコンパクトな新書 (1965年10-12月出版) を世に問うた<sup>4)</sup>。ルフランは、その後も『36年6月』(1966年) や『社会主義とサンディカリズムの諸問題』(1970年)、『人民戦線の実験』(1972年) など、人民戦線に関する研究や史料集を刊行して研究の進展に大きく貢献した<sup>5)</sup>。人民戦線期のCGTについては、1964年にアントワヌ・プロが実証度の高い研究を出している<sup>6)</sup>。

ルフランの大著が出た翌月の1965年3月に、ピエール・ルヌーヴァンとルネ・レモンが主宰した「レオン・ブルム、政府首班」という大規模なシンポジウムによって、人民戦線史は歴史研究として認知された<sup>7)</sup>。そこでは、ブルム内閣の政治・経済政策・社会政策・外交政策が本格的な議論の俎上に載せられた。総勢97名が参加したこのシンポジウムでは、ブルム内閣の関係者やブルムの友人も出席して証言し、正確に記録することへの熱意がみなぎっていた。同様のシンポジウムは、人民戦線40周年を迎える1975年12月にルネ・レモンとジャンヌ・ブルダンが主宰した「エドアル・ダラディエ、政府首班」として継続され、その成果は2冊の書物となって出版されている<sup>8)</sup>。ダラディエ・シンポジウムでは、CGTの元指導者ルネ・ブランとアンドレ・デルマスも出席して証言をし、両者はこのシンポジウム後に相継いで回想録を出版している<sup>9)</sup>。

これ以外の第1期の研究として、人民戦線の主要3政党を扱った政党史に優れたものが多い。ダニエル・R・ブラウアーのバランスの取れた共産党史、ナサネル・グリーンやリシャール・ゴンバン

3) Louis Bodin et Jean Touchard, *Front populaire 1936*, Paris, 1961.

4) Georges Lefranc, *Histoire du front populaire*, Paris, 1965; Georges Lefranc, *Le front populaire 1934-1938*, Paris, 1965.

5) Georges Lefranc, *Juin 36*, Paris, 1966; Georges Lefranc, *Essai sur les problèmes socialistes et syndicaux*, Paris, 1970; Georges Lefranc, *L'expérience du Front populaire*, Paris, 1972.

6) Antoine Prost, *La C.G.T. à l'époque du Front populaire 1934-1939*, Paris, 1964. 最新のCGT研究は、Morgan Poggioli, *La CGT de Front populaire à Vichy, De la réunification à la dissolution 1934-1940*, Paris, 2007.

7) Colloque, *Léon Blum, chef de gouvernement 1936-1937*, Paris, 1967.

8) Colloque, *Edouard Daladier, chef de gouvernement 1938-1939*, Paris, 1977; René Rémond et Janine Bourdin dir., *La France et les Français en 1938-1939*, Paris, 1978.

9) René Belin, *Du secrétariat de la C.G.T. au gouvernement de Vichy*, Paris, 1978; André Delmas, *Mémoires d'un instituteur syndicaliste*, Paris, 1979. デルマスは1950年にも回想録を出していた (André Delmas, *A gauche de la barricade*, Paris, 1950.)。

やミシェル・ビリスによる社会党の対外政策研究、ピーター・J・ラーモアの1930年代の急進党史などである<sup>10)</sup>。また、セルジュ・バルステンの浩瀚な急進党研究とロバート・マイケルによる急進党の対ドイツ政策研究は、時期的には第2期に属するものだが、内容的には第1期と重なる研究なので、ここにあげておこう<sup>11)</sup>。さらに、ジャン＝ポール・ジュベールの研究とギー・ブルデの研究も重要である<sup>12)</sup>。社会党革命左派に焦点を当てたジュベールの研究には、1968年の「5月革命」の影響を垣間見ることができるが、異色なのは人民戦線の解体期を扱ったブルデの研究だろう。人民戦線の形成過程に研究の重心が置かれていた第1期に、彼が1938年11月30日のゼネストにいたる人民戦線の敗北過程を論じたことは斬新であった。ルフランの大著すら、ブルム内閣崩壊後の37年6月から38年11月までの時期には全15章中の1章しか割りあてていなかったからである。その他、第1期には作家が1936年の心性に迫る研究や通史を出している<sup>13)</sup>。

邦語文献では、1967年に出版された海原峻『フランス人民戦線』（中公新書）とジョルジュ・ルフラン『フランス人民戦線』（高橋治男訳、文庫クセジュ、白水社、1969年）を先鋒とし、70年代初めまでの諸研究を摂取した平瀬徹也『フランス人民戦線』（近藤出版社、1974年）が、わが国の人民戦線研究の水準を押しあげた。平瀬氏は、人民戦線の成立から解体にいたる全過程を衡平にして偏頗なく叙述している。ただし、啓蒙書としての性格も併せ持った平瀬氏の書物は紙幅の制約もあったため、本書を超える研究が待たれている。

1970年代初めまでの研究には、反ファシズム・反恐慌に重点を置いた政治史の研究や評価が多かった。人民戦線運動の発火点となったスタヴィスキー疑獄事件、コンコルド広場の騒擾事件（2月6日事件）、フランス共産党（PCF）の戦術転換などの政治史に関心が注がれてきた。それは、当然、PCFに軸足を置いた歴史叙述をともなった。わが国の研究では、平田好成『フランス人民戦線論史序説』（法律文化社、1977年）が、その典型である。人民戦線の成立過程に9割の紙幅を割いた平田氏の研究は、人民戦線による権力の行使期や解体期についてはなおざりになりがちであった。たしかに、人民戦線はPCFのイニシアチブなしには語れない。PCFの柔軟路線とコミンテルン第7回大会（1935年7-8月）が、人民戦線運動をあと押ししたことは間違いない。その意味で、PCFを中心にして人民戦線の形成過程に焦点を当てる手法は間違っていない。

しかし、共産党系史家の研究には、ブルム内閣の成立までに全体の3分の2の紙幅をあてていたり、1934年春の激しい「日和見派」（ジャック・ドリオ派）批判と社会党批判、PCFに派遣されていたコミンテルン機関員オイゲン・フリートの役割などについて触れられていないなど、視角や分析

10) Daniel R. Brower, *New Jacobins, the French Communist Party and the Popular Front*, New York, 1968; Nathanael Greene, *Crisis and Decline: The French Socialist Party in the Popular Front Era*, New York, 1969; Richard Gombin, *Les socialistes et la guerre: la S.F.I.O. et la politique étrangère française entre les deux guerres mondiales*, Paris, 1970; Michel Bilis, *Socialistes et pacifistes: l'intenable dilemme des socialistes français 1933-1939*, Paris, 1979; Peter J. Larmour, *The French Radical Party in the 1930's*, Stanford, 1964.

11) Serge Bernstein, *Histoire du parti radical*, 2 tomes, Paris, 1980-82; Robert Michael, *The Radicals and Nazi Germany 1934-1939*, Washington D.C., 1982. 2007年に出た次の研究も、内容的には第1期に属する (Pascal-Éric Lalmy, *Le Parti radical-socialiste et le Front populaire 1934-1938*, Paris, 2007.)。

12) Jean-Paul Joubert, *Révolutionnaires de la SFIO, Marceau Pivert et le pivertisme*, Paris, 1977; Guy Bourdè, *La défaite du front populaire*, Paris, 1977.

13) Maurice Chavardès, *Été 1936: La victoire du Front populaire*, Paris, 1966; Jaques Delperrié de Bayac, *Histoire du front populaire*, Paris, 1972.

の偏りが見受けられる<sup>14)</sup>。それゆえ、フランス共産党史の翻訳書である『フランス人民戦線史』（人民戦線史翻訳刊行委員会訳、新日本出版社、1971年）や共産党書記長モーリス・トレーズの回想録（『人民の子』北原道彦訳、大月書店、1978年）、およびトレーズの演説集（『フランス人民戦線』坂井信義訳、大月書店、1976年）は、史料的には注意を要する文献である。

1970年代は「証言の時代」にふさわしく、人民戦線運動に関与した当事者の発言が多く訳出されている。トロツキスト系の労働運動活動家と覚しき2名（ジャック・ダノス、マルセル・ジブラン）による『フランス人民戦線—1936年民衆蜂起—』（吉田八重子訳、柘植書房、1975年、原著1972年）は、労働運動史の視点から36年の「社会的爆発」を描いた。また、社会党革命左派のダニエル・ゲラン『人民戦線—革命の破産—』（海原峻訳、現代思潮社、1968年、原著1963年）は、副題にあるように人民戦線が革命を裏切ったと総括し、同派のジャン・プラデルによる『スペインに武器を—人民戦線とフランスの《革命》1936—』（吉田八重子訳、鹿砦社、1974年、原著？）は、人民戦線政府のスペイン不干渉政策を糾弾した本である。さらに、ジャック・ドリオとフランス人民党を論じたディーター・ヴォルフの研究書、『フランスファシズムの生成—人民戦線とドリオ運動—』（平瀬徹也・吉田八重子訳、風媒社、1972年、原著1967年）も出版され、フランス・ファシズム論への関心を高めた<sup>15)</sup>。

## （2）第2期 人民戦線史研究の転回（1980–2000年）

1980年以降、唯物史観の影響力の低下と社会史パラダイムの影響力の増大、ミッテラン社会党政権の誕生（1981年）、現実政治の場でのソ連・東欧圏の衰退と瓦解（1989–91年）などによって、人民戦線の歴史研究も新たな段階を迎えるにいたった。第2期の始まりである。第2期の人民戦線史研究は、マニフ（示威運動）の政治文化・身体表象史・ブルジョワジーの反応・知識人や出版文化・ラロック大佐の研究などの個別研究に特色がある<sup>16)</sup>。また、パリを中心とした人民戦線史ではなくて、人民戦線の地方史研究も増えつつあった<sup>17)</sup>。

第2期の特色ある研究として、社会党員マルセル・リヴィアンのブルム内閣の移民政策を論じた

14) 共産党史家としての研究として、Serge Wolikow, “Le P. C. F. et le Front populaire”, in Roger Bourderon, Jean Burles, Jacques Girault et al., *Le PCF, étapes et problèmes 1920–1972*, Paris, 1981. ウォリコウの次の研究 (Serge Wolikow, *Le Front populaire en France*, Bruxelles, 1996.) は、冷戦解体以後に可能になった新史料も用いているが、基本的には共産党視点でブルム内閣成立までに3分の2の紙幅を割いている。時期的には第2期に属するが、4巻本の優れた共産党史をあげておきたい (Philippe Robrieux, *Histoire intérieure du parti communiste*, 4 tomes, Paris, 1980–84.)。フリートを論じた研究に、Annie Kriegel et Stéphane Courtois, *Eugen Fried, le grand secret du PCF*, Paris, 1997.

15) 今日までのフランス・ファシズム論争については、渡辺和行『フランス人民戦線—反ファシズム・反恐慌・文化革命—』人文書院、近刊、第1章。

16) Phippe Burrin, “Poings levés et bras tendu. La contagion des symboles au temps du Front populaire,” *Vingtième Siècle*, no. 11, 1986; Danielle Tartakowsky, “Manifestations, fêtes et rassemblements à Paris (juin 1936–novembre 1938),” *Vingtième Siècle*, no. 27, 1990; Danielle Tartakowsky, *Le pouvoir est dans la rue; Crises politiques et manifestations en France*, Paris, 1998, chap. 3; Gille Vergnon, “Le «poing levé», du rite soldatique au rite de masse. Jalons pour l’histoire d’un rite politique,” *Mouvement Social*, no. 212, 2005; Ingo Kolboom, *La revanche des patrons*, Paris, 1986; Géraldi Leroy et Anne Roche, *Les écrivains et le front populaire*, Paris, 1986; Jacques Nobécourt, *Le colonel de La Rocque 1885–1946*, Paris, 1996.

17) 北フランスの研究が多い。M. Gillet et Y. M. Hilaire dir., *De Blum à Daladier, le Nord/Pas-de-Calais 1936–1939*, Lille, 1979; Jean-Luc Pinol, *Espace social et espace politique, Lyon à l’époque du front populaire*, Lyon, 1980; Pascale Brémersch et Jean-Michel Decelle, *1936, le front populaire dans le Pas-de-Calais*, Tournais, 1997.

研究をあげておこう<sup>18)</sup>。本書は、先行研究の少ないテーマを扱った文献であり、フランスの移民史研究の黎明期に出版された先駆的な研究である。第2期の邦語文献として、社会運動史ないしサンディカリズムの視点から36年6月の「社会的爆発」を論じた研究をあげておく。労働者の心性にまで迫ろうとした谷川稔氏の論文「フランス人民戦線の〈夢〉と〈祭〉」(1980年)<sup>19)</sup>は、第2期の始まりを告げるにふさわしい論攷である。

この第2期に人民戦線史研究は大きく転回した。人民戦線50周年の1986年に、ジャン・ブーヴィエが1冊の本を編んでいる。フランスの歴史雑誌『社会運動』に掲載されてきた人民戦線に関わる16本の論考が5部構成で編纂され、その第5部は「文化と政治」と題されていた<sup>20)</sup>。「文化」が掲げられたことに注意しよう。また、人民戦線50周年を総括してマドレーヌ・ルベリユーが、1988年に人民戦線の研究動向をまとめたように、そこにも視座の変化は如実に表れている。彼女は、「映像」「余暇」「表象」といった新しいテーマの研究から紹介を始め、「地方」「知識人」「キリスト教徒」の研究紹介へと進み、「スペイン」「政治」のテーマが最後に置かれるという構成で研究を整理していた<sup>21)</sup>。つまり、伝統的な政治史や外交史は旗色が悪くなり、表象や労働者文化など社会史の影響を受けたテーマに研究の重心が移動しつつあった。このように、人民戦線の歴史研究はメタモルフォーゼを遂げるにいたるが、その理由として以下の4点を指摘できるだろう。

第1に、上述した政治史から社会史へという歴史学パラダイムの転回によって、反ファシズム人民戦線という政治史から、日常生活や余暇の組織化といった文化社会史へと研究が深化した。フランス革命200周年が到来する1980年前後には、モナ・オズーフの『革命祭典』(立川孝一訳、岩波書店、1988年、原著1976年)やリン・ハントの『フランス革命の政治文化』(松浦義弘訳、平凡社、1989年、原著1984年)が出版されて、祭りや政治文化に関心が集まったことも、人民戦線史研究に影響を及ぼしたことだろう。

こうした研究関心の移動は、ルフランの大著が人民戦線の「文化政策」を論じていなかったのに、ジャック・ケルゴアの人民戦線史(1986年)は終章を「文化運動」にあてたことや、作家ロジェ・ボルディエの『36年の祭り』(1985年)やクリストフ・ブスマールの『楽しい気晴らし』(1986年)にも窺うことができる<sup>22)</sup>。このような趨勢は、人民戦線の50周年(1986年)に開かれた2つのシンポジウムにも端的に示されている。この記録は、4年後の1990年に『社会運動』に特集として掲載された。『社会運動』の「有給休暇」特集(150号)は、1986年11月にストラスブール第3大学で行われたシンポジウム「有給休暇の50年」に寄せられた論文であり、「政治文化と人民戦線」の特集(153号)は、1986年9月にパリ第1大学で行われたシンポジウム「人民戦線とフランス人の日常生活」

18) Marcel Livian, *Le parti socialiste et l'immigration*, Paris, 1982.

19) 谷川稔「フランス人民戦線の〈夢〉と〈祭〉」同『フランス社会運動史』山川出版社、1983年。初出は、入江節次郎・高橋哲雄編『講座西洋経済史Ⅳ 大恐慌前後』同文館、1980年。

20) Jean Bouvier dir., *La France en mouvement 1934-1938*, Seyssel, 1986.

21) Madeleine Rebérioux, "Le cinquantenaire de Front populaire," *Mouvement Social*, no. 143, 1988, pp. 115-130.

22) Jacques Kergoat, *La France du front populaire*, Paris, 1986; Roger Bordier, *36, la fête*, Paris, 1985; Christophe Boussemart, *L'échappée belle, 1936, les Ch'tis à l'assaut des loisirs*, Lille 1986.

で発表された論文である<sup>23)</sup>。これらのシンポジウムの報告紹介論文が、廣田功「フランス人民戦線期の《日常生活》—50周年記念集をめぐって—」『社会経済史学』（第54巻6号、1989年）である。廣田論文のなかでも、政治史・外交史・経済史中心の研究から、これらの領域を含み込んだ日常生活史や社会史（ストライキと女性・新しい政治文化・スポーツ・映画・ラジオ放送・青年運動・余暇と有給休暇など）へと変貌を遂げつつあることが触れられていた。

さらに、人民戦線期の「文化と政治」を論じたパスカル・オリイの大著『美しき幻影』<sup>ラ・ベル・イリュージョン</sup>が1994年に刊行され、95年にアラン・コルバン編『レジャーの誕生』が、96年にはヴァカンスの通史も刊行されて、こうした趨勢に棹をさした<sup>24)</sup>。オリイの書名は、ジャン・ギャバンが主演を演じて評判になった2つの映画のタイトル、「我等の仲間」<sup>ラ・ベル・エキブ</sup>（ジュリアン・デュヴィヴィエ監督、1936年）と「大いなる幻影」（ジャン・ルノワール監督、1937年）から採られている。ここにも、人民戦線期の「文化と政治」への並々ならぬ関心を窺うことができる。ただし、オリイの大著は網羅的である分、個別には分析が浅い項目もある点、コルバンの論集は人民戦線期の余暇が対象になっているわけではない点に注意が必要である。『CGTによる文化的な冒険』（1996年）も、文化史的な問題関心から編集されたものだろう<sup>25)</sup>。

こうして、反ファシズム（政治史）・反恐慌（経済史）・文化革命（文化史）<sup>トリアーデ</sup>の三幅対としての人民戦線史研究がスタートした。それには、ミッテラン政権が登場して有給休暇が5週間に拡大されたことも大きく寄与していた。ジュリアン・ジャクソンの研究は、こうした政治的変化からインスピレーションを得て進められた研究である<sup>26)</sup>。

文化革命としての人民戦線を論じた邦語文献には、廣田功「フランス人民戦線の《文化革命》の一側面」中央大学人文科学研究所編『希望と幻滅の軌跡—反ファシズム文化運動序説—』（中央大学出版部、1987年）、廣田明「両大戦間期フランスにおける余暇の組織化」権上康男、廣田明、大森弘喜編『20世紀資本主義の生成』（東京大学出版会、1996年）、平松佳子「フランス人民戦線期、CGTが摸索した民衆ツーリズムについての一考察」『学習院史学』（第45号、2008年）があるだけで、これら3本以外に本格的な研究はいまだない。文化革命は、旅行・スポーツ・芸術分野における余暇の組織化という今日的な問題と重なる重要なテーマである。さらに、過労死や過労自殺が相継ぐわが国の問題を考える上で、また、観光立国を柱に掲げるわが国にとっても、余暇社会の原点である1930年代フランスの議論を知ることは、こうした問題に歴史的パースペクティブを与える点でも有意義だろう。

第2に、ソ連の崩壊によって旧ソ連側の史料が公開されたとことで、ソ連やコミンテルンの動向

23) *Mouvement Social*, no. 150, 1990, p. 18; Danielle Tartakowsky, "Front populaire et renouvellement des cultures politiques," *Mouvement Social*, no. 153, 1990, p. 3.

24) Pascal Ory, *La belle illusion, Culture et politique sous le signe du front populaire 1935-1938*, Paris, 1994; Alain Corbin, *L'avènement des loisirs 1850-1960*, Paris, 1995. 渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店、2000年。André Rauch, *Vacances en France de 1830 à nos jours*, Paris, 1996.

25) Marius Bertou et Jean-Michel Leterrier, *L'aventure culturelle de la CGT*, Montreuil, 1996.

26) Julian Jackson, *Popular Front in France, Defending Democracy 1934-38*, Cambridge, 1988. 邦訳『フランス人民戦線史』昭和堂、1992年。



により注意が払われるようになり、それに反比例するかたちで、PCFの自主性については従来ほど重きが置かれなくなった<sup>27)</sup>。すなわち、人民戦線戦術の採択に関してPCFの主導性が否定され、コミンテルンが路線転換を主導したことが明白となり、モスクワかパリかという人民戦線の起源論争は決着を見た。それとともに、フランス国内の政治動向、心性、景況、握り拳の身体表象や街頭の政治文化、文化運動などにも、いっそう目配りがなされるようになった（注16参照）。

第3に、ミッテラン社会党政権（1981-95年）の誕生によって人民戦線が左翼の政権到達モデルでなくなり、人民戦線に対する実践的で政治的な関心が低下した<sup>28)</sup>。多党制の政治文化をもつフランスでは、小選挙区二回投票制という選挙制度は、選挙連合から議会連合、そして連合政府にいたる多数派形成の制度的な叡智であった。しかし、1981年に社会党は単独で過半数の議席を獲得し、左翼連合としての人民戦線方式は多数派形成の絶対的な公式ではなくなった。2012年のオランド社会党政権の成立は、人民戦線方式を完全に過去の歴史事象としたことだろう。ミシェル・ヴィノックが、2006年に著した「人民戦線の遺産」を検証する書物は、2006年時点の左翼勢力の分裂という現状批判から出た時評的論攷でもあった<sup>29)</sup>。

第4に、第二次世界大戦期から戦後にかけてドイツとソ連に押収されていたフランス側の史料（内務省、陸軍省、人民連合、人権同盟、労働総同盟、ブルムやジュール・モックなどの個人文書、いわゆる「モスクワ文書」）が1990年代から21世紀の初めにかけて返還されたことで、研究状況は大きく好転した。ソフィー・クーレ女史の研究が、返還までの過程を完璧に解明している<sup>30)</sup>。

以上のような転回を経験しつつ、実証的な研究は進められていた。第2期の研究の特徴として、カトリックやフランスキリスト教労働者同盟（CFTC）と人民戦線との関係といったテーマに力作がみられる。1930年代のカトリック史にはルネ・レモンの先駆的な研究があったが、ポール・クリストフが人民戦線期のカトリックを正面から取り上げ、ロシュフォル＝チュルカンが人民戦線派のキリスト者を扱った研究を上梓した。戦間期のCFTCを研究したミシェル・ロネーは、人民戦線に1章80頁（全6章393頁）をあてている<sup>31)</sup>。また第2期には、ブルム内閣の対スペイン不干渉政策という伝統的な外交史研究ではなくて、スペイン内戦に対するフランス世論の反応や内政と外交のリンクエッジなどの新しいテーマの研究が登場した<sup>32)</sup>。書名が『フランスとスペイン内戦』ではなくて、『フランス人とスペイン内戦』であることに注意しよう。書名に象徴されるように新しい研究は、政治の中枢レヴェルの国家政治史ではなくて、社会の末端まで降りて、個々のフランス人や社

27) フランソワ・フェレ、楠瀬正浩訳『幻想の過去』バジリコ、2007年、第7章。

28) Antoine Prost, "Conclusion," in Gilles Morin et Gilles Richard dir., *Les deux France du Front populaire: chocs et contre-chocs*, Paris, 2008, p. 391.

29) Michel Winock, *La gauche au pouvoir, l'héritage du Front populaire*, Paris, 2006.

30) Sophie Cœuré, *La mémoire spoliée, les archives des Français, butin de guerre nazi puis soviétique de 1940 à nos jours*, Paris, 2007, pp. 156-162. ソフィー・クーレ、剣持久木訳「記憶の略奪」『日仏歴史学会会報』第28号、2013年、38-50頁。

31) René Rémond, *Les catholiques dans la France des années 30*, Paris, 1979, C1960; Paul Christophe, *1936, les catholiques et le front populaire*, Paris, 1979; Agnès Rochefort-Turquin, *Front populaire, Socialistes parce que chrétiens*, Paris, 1986; Michel Launay, *La C.F.T.C.: origines et développement 1919-1940*, Paris, 1986.

32) David W. Pike, *Les français et la guerre d'Espagne*, Paris, 1975; Jean Sagnes et Sylvie Caucanas eds., *Les français et la guerre d'Espagne*, Perpignan, 1990.

会集団がスペイン内戦にどう対応したのかを解明するという下からの視点を確認できるだろう<sup>33)</sup>。

第2期には人民戦線史研究のエアポケットであった植民地政策の研究が進捗をみ、英語圏でフランス植民地研究が公刊されている。1983年にフランスの植民地ロビーの研究が出版され、翌年にモロッコ総督ノゲスを中心にフランスの植民地政策を論じた書物が刊行された<sup>34)</sup>。しかし、この2書は人民戦線期を主な対象とはしていないので、1987年に人民戦線期のアルジェリアを論じたバンジャマン・ストラの研究をあげるべきだろう。その4年後にクラクシスが、人民戦線期の社会党と北アフリカについて1章を割いている<sup>35)</sup>。また、ポストコロニアリズムや帝国史の影響下に、1996年2月にポーツマス大学で開かれた研究集会の成果が『フランス植民地帝国と人民戦線』(1999年)という論集である。人民戦線と植民地問題は研究史上の大きな欠落であっただけに、本書はこのテーマに関する必読文献となった<sup>36)</sup>。

### (3) 第3期 反ファシズム・反恐慌・文化革命としての人民戦線(2000年～現在)

こうして2000年以降、人民戦線史研究の第3期が始まり、人民戦線70周年が到来した2006年に第2の研究のピークを迎えた。この年には廉価な新書版の人民戦線史が数冊出版されていることや、戦間期のフランス史を牽引してきたアントワヌ・プロの人民戦線論集が刊行されたことも、こうした趨勢を傍証しているだろう<sup>37)</sup>。また、1976年に出版された新聞のスクラップ史料集のような書物が2006年に再刊されたところにも、出版界が人民戦線に注目している様子を窺うことができる<sup>38)</sup>。なお、文庫クセジュには版を重ねているルフランの本以外に、1991年と2011年に2冊の人民戦線史が出版されている<sup>39)</sup>。

人民戦線70周年にも記念シンポジウムが開かれている。2006年12月に高等師範学校で開かれたシンポジウム「人民戦線—衝撃と反作用1934-1940—」では、「モスクワ文書」を用いた報告が多数を占めた<sup>40)</sup>。ただし、返還された労働総同盟の文書は未整理とはいえ、「モスクワ文書」によって人民戦線史が大きく書き換えられることはないとみてよいだろう<sup>41)</sup>。なお、「モスクワ文書」を用いた最初のブルム伝はイラン・グレイルサマーの研究(1996年)であり、最初の人民戦線通史はフレデリ

33) 今世紀に入って、フランス社会と関わるスペイン内戦ものがまた出版されている。David W. Pike, *France divided: The French and the Civil War in Spain*, Brighton, 2011; Martin Hurcombe, *France and the Spanish Civil War: Cultural Representations of the War Next Door, 1936-1945*, Surrey, 2011.

34) Stuart M. Persell, *The French Colonial Lobby 1889-1938*, Stanford, 1983; William A. Hoisington, Jr., *The Casablanca Connection: French Colonial Policy 1936-1943*, Chapel Hill, 1984.

35) Benjamin Stora, *Nationalistes algériens et révolutionnaires français au temps du front populaire*, Paris, 1987; Ahmed Koulakssis, *Le parti socialiste et l'Afrique du nord de Jaurès à Blum*, Paris, 1991.

36) Tony Chafer and Amanda Sackur ed., *French Colonial Empire and the Popular Front: Hope and Disillusion*, London, 1999.

37) Jean Lacouture, *Le Front populaire*, Tours, 2006; Daniel Grason, René Mouriaux, Patrick Pochet, *Éclats du front populaire*, Paris, 2006; Jean-Pierre Rioux éd., *Le Front populaire*, Paris, 2006; Antoine Prost, *Autour du front populaire: Aspects du mouvement social au XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, 2006.

38) André Rossel-Kirschen, *L'Été 36, 100 jours du Front populaire*, Paris, 2006, C1976.

39) Jean-Paul Brunet, *Histoire du front populaire 1934-1938*, Paris, 1991; Jean Vigreux, *Le Front populaire*, Paris, 2011.

40) Gilles Morin et Gilles Richard dir., *Les deux France du Front populaire: chocs et contre-chocs*, Paris, 2008.

41) これは、2012年10月末に来日したソフィー・クーレ氏の見解でもある。

ック・モニエの新書（2002年）である<sup>42)</sup>。

2006年にはシンポジウムがほかにも2つ開かれており、写真集などの出版とあわせて研究の新たな活性化を示している<sup>43)</sup>。2つのシンポジウムとは、パリ第10大学で開催された「フランス・スペイン・チリの人民戦線—歴史・表象・記憶—」のシンポジウム、および2006年6月にブルゴーニュ大学で共産党系史家が開いた「人民戦線の実験と刻印—活動家・地域・記憶—」という国際シンポジウムである。前者のシンポジウム記録は未刊であるが、後者の論文集は刊行されている<sup>44)</sup>。なお、わが国でも2007年6月に、廣田功氏が中心になって人民戦線70周年の日仏比較シンポジウムが開かれたことを付言しておこう<sup>45)</sup>。

また第3期には、地方の人民戦線史のさらなる展開と女性史の参入が見られたことも特徴の1つである。地方史では北仏ヴァランシエンヌ、中仏アンドル県、南東部ローヌ県、南西部ドルドーニュ県、南仏マルセイユ地区の研究などが出版されている<sup>46)</sup>。女性史では人民戦線期のCGTと女性の労働環境をめぐる史料集やパトリシア・ラトゥールの『女たちの36年』がその代表であるが<sup>47)</sup>、ここにも女性史やジェンダー・スタディーズという広義の社会史の影響を垣間見ることができる。また、2006年に『人民戦線は祭』という小著が公刊されたところにも、社会史の影響が表れている<sup>48)</sup>。

政治文化や表象研究の分野で、英語圏の研究者の貢献も看過できない。アンドリュウとアンガーによる人民戦線期の「文化の詩学」は、植民地の表象をも問題にしているところに第3期らしさが出ている。また、サイモン・デルの研究やウォードホーの研究は、第2期から始まった表象研究や街頭の政治文化研究における英語文献の成果である<sup>49)</sup>。共産党研究もさま変わりであり、反軍国主義路線と国防強化路線の葛藤を描いたヴィダルの研究が出色だ<sup>50)</sup>。ブルム内閣がフランス版ニューディールを追求したように、重要な対米関係を論じたのがマルク・ショーの研究である<sup>51)</sup>。さらに、人民戦線政府内で余暇担当次官として、余暇の組織化に尽力したレオ・ラグランジュの研究が増えている

42) Ilan Greilsammer, *Blum*, Paris, 1996; Frédéric Monier, *Le Front populaire*, Paris, 2002, pp. 109–111.

43) 写真集には、Danielle Tartakowsky, *Le Front populaire, la vie est à nous*, Paris, 1996; Claude Keiflin, *L'été 36 en Alsace*, Strasbourg 1996; Denis Lefebvre et Rémi Lefebvre, *Mémoires du front populaire*, Ours, 1997; Jacques Girault, *Au-devant du bonheur, les Français et le Front populaire*, CIDE, 2005; Michel Margairaz et Danielle Tartakowsky, *L'avenir nous appartient*, Paris, 2006; Martin Pénét, *Été 36 sur la route des vacances en images et en chansons*, Omnibus, 2006; Jean Lacouture, *Le Front populaire*, Tours, 2006; Françoise Denoyelle, François Cuel et al., *Le Front populaire des photographes*, Éditions terre-bleue, 2006; M. Margairaz et D. Tartakowsky, *Le Front populaire*, Paris, 2009.

44) Xavier Vigna, Jean Vigreux, Serge Wolikow dir., *Le pain, la paix, la liberté, expériences et territoires du front populaire*, Paris, 2006.

45) 南祐三「1930年代の遺産と記憶—参加記」『日仏歴史学会会報』23号、2008年、9–12頁。

46) Franck Bétriche, *Le front populaire dans le Valenciennois*, Saint-Cyr-sur-Loire, 2003; Jean-Pierre Muller, *Chronique des années trente dans l'Indre, Le Front populaire*, Saint-Cyr-sur-Loire, 2011; Maurice Moissonnier, *Le mouvement ouvrier rhodanien dans la tourmente 1934–1945*, t.1 *Le Front populaire*, Lyon, 2004; Jean-Paul Salon, *Au temps du Front populaire*, Périgueux, 2005; Violette Marcos et Progreso Marin, *1936, luttes sociales dans le Midi*, Portet-sur-Garonne, 2006; Xavier Daumalin et Jean Domenichino, *Le Front populaire en entreprise: Marseille et sa région 1934–1938*, Éditions Jeanne Laffitte, 2006.

47) Morgan Poggioli, *À travail égal, salaire égal?, La CGT et les femmes au temps du Front populaire*, Dijon, 2012; Patricia Latour, *Le 36 des femmes*, Pantin, 2006.

48) Céline Jan et Laurent Acharian, *Le front populaire est une fête*, Éditions des Équateurs, 2006.

49) Dudley Andrew and Steven Ungar, *Popular Front Paris and the Poetics of Culture*, Cambridge, 2005; Simon Dell, *The Image of the Popular Front: The Masses and the Media in Interwar France*, Hampshire, 2007; Jessica Wardhaugh, *In Pursuit of the People, Political Culture in France 1934–39*, Hampshire, 2009.

50) Georges Vidal, *La Grande Illusion?, Le parti communiste français et la défense nationale à l'époque du front populaire 1934–1939*, Lyon, 2006.

51) Marc Chau, *Le Front populaire et les États-Unis 1936–1938*, Paris, 2009. 戦後まで視野に入れたフランス版ニューディールの研究には、Philip Nord, *France's New Deal from the Thirties to the Postwar Era*, Princeton, 2010.

るのも第3期の特色である<sup>52)</sup>。

以上のように、フランスにおける人民戦線史研究は、30周年以降、1996年を除いて10年ごとにシンポジウムが開かれて研究をリードしてきたことが分かるだろう。

#### (4) 人民戦線の個別研究

最後に人民戦線史の特論的な研究を整理紹介しておこう。政治家研究では、首相であったブルム論が圧倒的に多い。古くは、社会党左派のコレット・オードリによる批判的なブルム論、ジョエル・コルトンによる初めてのアカデミックな研究、ジャーナリストのジャン・ラクチュールによる浩瀚な研究、近年では先述したグレイルサマーの評伝や36年選挙から政権就任までの40日間のブルムを追ったガイヤールの研究、ブルムにとっての社会主義を論じたフラベの研究、下院でのブルムに対する反ユダヤ攻撃をテーマにしたブリュトマンとジョリーの共著、政治史家セルジュ・ベルステンの研究、ブルムの統治機構論や公法観に迫ったヴァンサン・ル・グランの研究、法律家ブルムに焦点を当てたジェローム・ミシエルの小品などがある<sup>53)</sup>。人民戦線運動の発火点となったスタヴィスキ事件や2月6日事件については、古くは作家モーリス・シャヴァルデスの文献のほかに、古典とも言うセルジュ・ベルステンの研究に加えて、ペリシエやジャンコウスキの研究が2000年に出ている<sup>54)</sup>。

わが国の研究者の手になる特論的な人民戦線研究として、次の4冊をあげておこう。渡辺和行『フランス人とスペイン内戦—不干渉と宥和—』（ミネルヴァ書房、2003年）は、ブルム内閣の対スペイン不干渉政策について、政策決定機関の権限と政策決定の過程および決定機関を取り巻く左右両翼の政治集団と社会集団の意見を検討して不干渉政策の決定過程を立体的に描き、不干渉が宥和現象の原型となったことを示した。廣田功『現代フランスの史的形成—両大戦間期の経済と社会—』（東京大学出版会、1994年）は、人民戦線期の社会経済政策について本格的に研究した文献であり、全8章中4つの章が人民戦線期にあてられている。また、冒頭でも触れた竹岡敬温『世界恐慌期フランスの社会』は、ブルム内閣の経済政策を中心としつつもミュンヘン会談と世論の関係、クロワ・ド・フーと人民党にみるファシズムの思想と行動を論じた重厚な研究である。フランス・ファシズム論争史と関わらせつつ、クロワ・ド・フーの歴史を指導者ラロックの思想や運動と絡めて描写し

52) Yann Lasnier, *Léo Lagrange, l'artisan du temps libre*, Paris, 2007; Christine Bouneau et Jean-Paul Callède dir., *Léo Lagrange: Une perspective de renouvellement dans la construction des jeunes générations?*, Pessac, 2012. 第2期の研究として、Jean-Louis Chappat, *Les chemins de l'espoir ou combats de Léo Lagrange*, Éditions Fédération Léo Lagrange, 1983; Pierre Mauroy, *Léo Lagrange*, Paris, 1997. ラグランジュの妻で同志でもあったマドレーヌの回想録に、Madeleine Léo-Lagrange, *Le présent indéfini. Mémoires d'une vie*, Orléan, 1998. 戦死したラグランジュへのオマージュとして彼の演説などを編んだ文献に、Eugène Raude et Gilbert Prouteau, *Le message de Léo Lagrange*, Paris, 1950.

53) Colette Audry, *Léon Blum ou la politique du juste*, Paris, 1955; Joel Colton, *Léon Blum, Humanist in Politics*, New York, 1966; Philippe Bauchard, *Léon Blum, le pouvoir pour quoi faire?*, Paris, 1976; Jean Lacouture, *Léon Blum*, Paris, 1977; Jean-Michel Gaillard, *Les 40 jours de Blum*, Paris, 2001; David Frapet, *Le socialisme selon Léon Blum*, Paris, 2003; Tal Bruttman et Laurent Joly, *La France antijuive de 1936: L'agression de Léon Blum à la chambre des députés*, Éditions des Équateurs, 2006; Serge Berstein, *Léon Blum*, Paris, 2006; Vincent Le Grand, *Léon Blum (1872-1950): Gouverner la République*, Paris, 2008; Jérôme Michel, *Un juriste en politique*, Paris, 2008.

54) Maurice Chavardès, *Le 6 février 1934: La République en danger*, Paris, 1966; Serge Berstein, *Le 6 février 1934*, Paris, 1975; Paul F. Jankowski, *Cette vilaine affaire Satvisky*, Paris, 2000; Pierre Pellissier, *6 février 1934, la République en flammes*, Paris, 2000.

たのが、剣持久木『記憶の中のファシズム―「火の十字団」とフランス現代史―』（講談社、2008年）である。

### 3. 急進党視角の人民戦線史

こうして、かつての反ファシズム運動としての人民戦線史（第1期）だけではなくて、ミッテラン政権の先蹤としての人民戦線政府という位置づけから、人民戦線の経済政策や社会政策、さらには、ヴァカンスの誕生による文化革命の側面へと研究の重心が移動した（第2期）。第1期は、ブルム内閣の成立にいたる人民戦線の形成過程に軸足を置いた共産党視角の歴史叙述をともなった。それに対して第2期は、権力の行使期としての人民戦線政府に重きを置いた社会党視角の歴史叙述に特徴があった。今日求められているのは、第1期と第2期の歴史叙述の総合である。第3期の人民戦線史研究は、こうした2つの視角に加えて、人民戦線の崩壊過程をも見据えた急進党視角が必要不可欠である。

なぜなら、人民戦線運動の誕生から権力の行使、そして崩壊の全過程をトータルに捉えようと思えば、急進党の動向を無視することはできないからである。1936年春の総選挙で、マルクス主義政党（社会党・共産党・プロレタリア統一党）が獲得した議席は228であったのに対して、反人民戦線派は237議席を獲得していた。反人民戦線派の議席数から中道右派政党を除くと、右翼の議席は222となり、社共両党の議席数とほぼ均衡していた。急進党（116議席）の動向、急進党と人民戦線との距離に大きな関心が集まるゆえんである。しかも上院第一党の急進派議席164を加えると、両院の最大政党は急進党であった<sup>55)</sup>。フランス政界に占める急進党の重要性が理解できるであろう。

1936年10月に開かれた急進党ビアリッツ党大会が物語るように、ブルム内閣誕生4ヵ月にして人民戦線批判の大合唱が起き、急進党の人民戦線への熱狂は過去の歴史となっていた<sup>56)</sup>。この時期に勃発したスペイン内戦、平価切り下げ、頻発する労働争議が急進派を苛立たせたことは否めない。たしかに、人民戦線運動は1934年2月6日事件によって触発され、コミンテルンと共産党の政策転換によって促進された。しかし、36年から38年までのすべての人民戦線政府に参加した主要政党は、急進党のみである。共産党は入閣すらしていない。しかも、38年10月、形骸と化していた人民戦線からの離脱を決議したのも急進党であった。したがって、急進党が人民戦線に参加した動機は重要な問いとなる。それは、急進党が人民戦線をいかにイメージし、何を動機として参加したのかという本質的な問いと密接に関わっている。言葉を換えれば、人民戦線に対する急進党の心象態<sup>イメージ</sup>と人民戦線の現実態<sup>リアリテ</sup>との乖離こそ、急進派の不満の原因であり、同時にそれは、人民戦線政府における急進党の行動を解明する鍵となるはずである。したがって、急進党が人民戦線に傾斜したプロセスこそが核心的問題となる。人民戦線の形成過程における急進党の動向が注目されるゆえんだ。

55) Jean Garrigues, "Les débats parlementaires du Front populaire," in Morin et Richard dir., *op. cit.*, p. 81.

56) 渡辺和行「人民戦線期の急進党1935-1936―2つの党大会から―」『香川法学』第4巻第3号、1985年。

つまり、人民戦線とはその定義上、労働者階級と中産階級の同盟であった。共産党視角の人民戦線史は、労働者階級からの人民戦線論という視角の偏りをもたらしていた。「中産階級にとって人民戦線とは何であったのか」という視点は、長期にわたって欠落していた。人民戦線の生成・発展・崩壊の全過程を十全に把握するためには、共産党視角に加えて、急進党視角も不可欠となる。今後の人民戦線史研究は、従来の共産党視角を是正する試みとして、共産党が重要な同盟相手とした中産階級の政党、急進党の動向を重視し、急進党に紙幅を費やす必要があるだろう。このアプローチを付加することによってのみ、人民戦線の全体像が提示できるのである。

#### 4. 21世紀の人民戦線史

21世紀の人民戦線史研究には、先述した共産党・社会党・急進党の3つの視角を具体化する次の3つの視点を加味して、総合的に把握することが求められている。

第3期の歴史叙述には、第1に、左翼の選挙連合・議会連合・連立政府とその政策という上からの視点（政治史的アプローチ）、第2に、広範な大衆を巻き込んだ社会運動としての下からの視点（社会運動史ないし社会史的アプローチ）、第3に、それまで上流階級が独占していた文化の民主化・民衆化を求めた文化革命の視点が必要となるであろう（文化史ないし政治文化史的アプローチ）。とくに第3の視点に立つ研究は、ミッテラン政権が有給休暇を5週間とした頃から飛躍的に進んできた。ブルム内閣の有給休暇法や週40時間労働法が、初めて労働者に余暇をもたらし、より人間らしく生きることを可能にしたからである。ブルム内閣で余暇担当次官職が設けられ、民衆ツーリズムの時代の開幕を告げたように、人民戦線は新たなライフスタイルをフランス人に教えた。それは、「週末（week-end）」という言葉がフランス語にはなく、英語から借用されて1926年以降普及していったところにも示されている。週40時間労働と有給休暇によって、フランス人は「週末」と「ヴァカンス」を体験することができたのである。

ともあれ、こうした3つの視角と3つの視点が有機的に結びつくことで、人民戦線の全体像が呈示できるはずである。21世紀のフランス人民戦線史研究は、人民戦線の誕生から解体までの歴史を、社・共・急三党に等しく目配りし、かつ政党の枠を越えた社会運動の側面や社会史的手法を考慮して描く必要があるだろう。それによってこそ、反ファシズム（政治史）・反恐慌（経済史）・文化革命（文化史）の三幅対<sup>トリアード</sup>としての人民戦線が呈示できるのである。その過程で、反ファシズムの論理（民主主義の防衛）と反恐慌の論理（反デフレーション、リフレーション政策）とが必ずしも整合的でなかったこと、反ファシズムの論理（戦闘ないし戦争の論理）と平和の論理とが二律背反関係にあったことも理解できるだろう。

